

北の譜

聞き手 奥津義広記者(北海道新聞社)

⑩<音を書く>

札幌で記念演奏会も

今年は「日本狂詩曲」がチェレブニン賞を受けてからちょうど五十周年に当たるので、札幌で記念コンサートをやってくださる話も出てるようです。去年(五十九年)はまた、私の古希記念のコンサートを、芥川也寸志君や黛敏郎君、石井真木君らかつての教え子たちでしてくれた。ほんとに感慨無量でした。

この時のコンサートには、「『ギリヤーク』から『ゴジラ』まで」というサブタイトルがついてました。「ギリヤーク」というのは「ギリヤーク族の古き吟誦(ぎんしょう)歌」(昭和十一年)という作品で、オーケストラ版は、この時が初演です。

この作品を作ったのは、北大理学部にいた服部健さんというギリヤーク学者が、語学から音楽へと研究対象を広げるにつけ、私のところに相談に見えたのがきっかけです。ギリヤーク族というのは、アムール川下流とサハリン北部に住む北方民族で、ベーリング海を渡ってアメリカ・インディアンと混血し、また戻ってきたといわれております。で、ギリヤークの音楽と、アメリカ・インディアンの音楽が関係あるかどうかを確かめたいというものでした。

それで、ギリヤークの子守歌なんかを聴いてみると、これが大変な音楽なんですね。こんなにいい旋律がなくなってしまうのは惜しいと、さっそく採譜をしました。が、その後、このままより作品として残したらどうかと考え、書いたのがこの歌曲です。

このコンサートでは、アイヌ民族の踊りをテーマにした「シンフォニア・タブカーラ」(五十四年改訂)も演奏されました。これは二十九年の作品で、翌年、アメリカのインディアナポリス響がセビツキーの指揮で初演し、その年か翌年日本でもやったものです。

ところが日本では「こんなもの音楽じゃない」と、評論家からはさんざんにけなされました。友人の三浦淳史君に献上した曲だけに、もう三浦君に合わせる顔がなくて…。

僕は音楽の世界では異端というか、楽壇の人とはほとんど付き合いもありません。黛君なんかは「孤高の人」なんて書いてますが、いずれにしろ私の作品が日本で評価されるようになったのはここ十年ぐらいのことです。それまでは外国ではやっても、日本ではほとんど演奏されていませんでした。

独自性欠く日本の楽壇

日本の音楽界はヨーロッパに追随するだけで独自のものはなかったんですね。レコードを出すため日本へ作品探しにきたベルギー人が、「シンフォニア・タブカーラ」に目をつけ、「日本にはフランス風とかドイツ風といった作品はあるが、独自のものは見当たらない」といってました。

私は小さいころのアイヌの人たちとの付き合いの中で、民族が違うと、音楽はこんなに違うの

かということも肌で知ったわけです。どうせ書くなら、個性のある自分のものを書きたいという気持ちは、こうしたところからきているのかもしれませんが。

それに彼らは、タップカーラで勝手なメロディーや詩を使って歌うことがわりに普通なんです。そういうバラードに接していたため、音を書くということに、それほど大げさでなく、取りかかれるということがあったんじゃないでしょうか。

バイエルやツェルニーから入って、モーツァルトのソナチネとかをやっていたとしたら、これはなかなか自分のものを書いているという気持ちには、ならないかもしれません。



▲東京音楽大学卒業式にて

一生に一度ソナタを

東京音大の学長をやってますと忙しい時もありますが、新しい作品も書いています。バイオリンとピアノのソナタのようなものです。昔バイオリンをやっていたので、すぐ古い型になったり、モダンになりすぎたりで、自分の思う線を出すのが、ゆれるつり橋を渡るように困難なんです。

それで何年もかかっているんですが、ここでくじけるのも業腹だと、何とかやっているんですけどね。ソナタの形式を壊しながらも、ソナタというものを一生に一度は書いてみたいという気持ちがあるんです。

(おわり)

昭和 60 年 4 月 8 日(月)夕刊
月曜ぷらざ